

左京五条三坊の調査

—第108-6次

1 はじめに

この調査は、個人住宅造成にともない、橿原市木之本町で実施した事前調査である。今回の調査地は、藤原京左京五条三坊西北坪の東南隅にあたり、1986年に発掘した第48-10次調査区の南に隣接する。

調査地内には、東西に走る五条条間路とその南北両側溝の存在が予想された。そこで、それらの検出を目的として、南北9m、東西3m、面積27㎡という南北方向のトレンチを設け、2000年6月6日から6月15日まで発掘調査をおこなった。

2 検出遺構と出土遺物

発掘区の土層は、上から表土、耕土、茶斑青灰色粘質土、青灰色粘質土、茶灰褐色粘質土の順となる。遺構検出は、茶灰褐色粘質土の面でおこなった。遺構面は現地表下約1.2~1.3mにあり、その標高は、調査区南端で約73.4m、調査区北端で約73.3mである。

調査の結果、予想どおり五条条間路を確認したほか、時期不明の小穴6個、溝4条などを検出した。このうち、五条条間路について述べる。

五条条間路 南北両側溝を検出した。路面幅は5.8~5.9mを測る。北側溝SD1260は、調査区北半にある素掘りの東西溝で、幅約60cm、深さ約10cm。青灰色砂混じり黄茶色砂質土が堆積するが、遺物はほとんど含まない。溝はごく浅いが、これは上部が削平されたためであろう。

南側溝SD1250は、調査区南端で検出した素掘りの東西溝である。幅は60cm以上で、南肩は調査区外となるため確認できない。深さ約25cm。これには、藤原宮期の土器などの遺物を含む暗茶灰色粘質土が堆積しており、北側溝とは堆積状況を異にする。遺物は、この南側溝を中心に、土器と瓦がそれぞれ少量出土した。

3 まとめ

これまでの調査で、五条条間路は、基本的に、側溝心間距離で7m弱の規模をもつことが確認されている。今回も、南側溝の南肩は未確認であるが、溝底の立ち上がりの状況から、側溝心々間距離は7m弱と推定され、

従来の知見と一致する。発掘面積は狭小であったが、左京地域では初めて五条条間路の発掘データを得ることができ、有意義な調査となった。(山下信一郎)

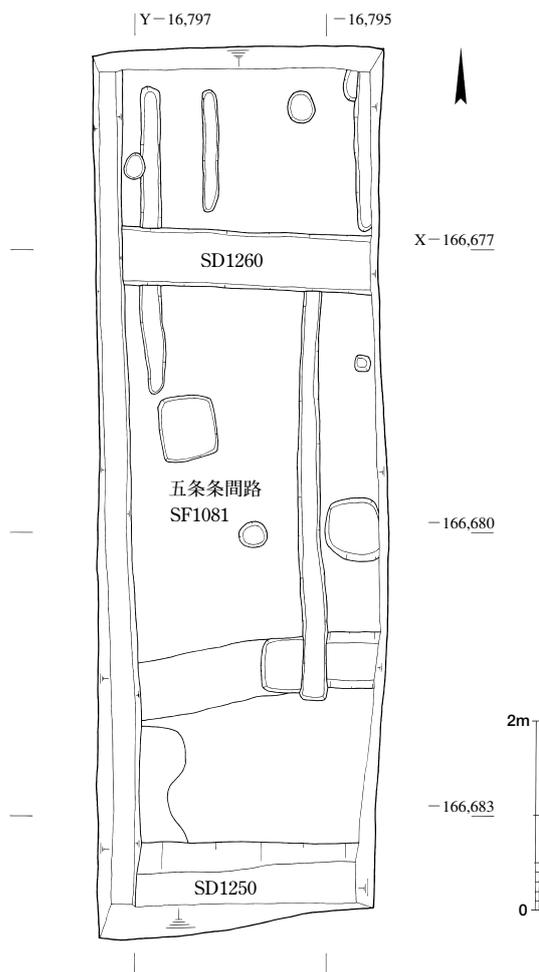


図68 第108-6次調査区全景(北から)と遺構図 1:80